

## インゲン（ハウス半促成）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
半促成	○	—	○	////////////////////									
主な作業	は種										土土 壤づ 消く 毒り	施肥	
				収穫									

### 技術体系

#### 1 作型の特徴

この作型は厳寒期の無加温栽培で、出荷量の少ない時期をねらった栽培である。

#### 2 適応地域

天草・球磨地域等平坦地域

#### 3 栽培条件

##### (1) 温度

生育温度が高温になるほど、花芽分化数や開花数が増加するが高温30℃以上になると落花・落さや等を起こす。低温については豆類の中では比較的強いが、気温13℃で生育を停止する。開花収穫数に影響を及ぼす気温は昼間18℃、夜間13℃である。

##### (2) 光

インゲンの光飽和点は、2～5万ルクスである。

##### (3) 土壌条件

排水良好で表土の深い肥沃な植壤土土壌で最も良い生育を示す。酸性に特に弱くpH6～7が適度である。土壌水分については乾湿の害が特にでやすく、土壌水分が充分でないと開花数が減少し収量も低下する。開花期に乾燥が続くと結実に悪影響を及ぼす。逆に加湿状態では生育が悪くなり滞水すると落葉を生じ収量は激減する。

連作障害の対応としてハウス等の施設の場合は、夏季太陽熱消毒や有機物の積極的施用が必要である。

#### 4 施設装備

(1) 連棟ハウス、単棟ハウス

内張りカーテンとトンネル被覆が必要である。

(2) カーテン

(3) トンネル

#### 5 経営目標

(1) 収量 3 t / 10a

(2) 投下労働時間 1880時間/10a

(3) 所得率 55%

(4) 経営規模 6a

(家族労働力2人の場合)

### 栽培技術

#### 1 品種

「ベストクroppキセラ」

60日前後で収穫できる中性丸莢種。花数多く多収が望める。2番果の開花が早いため長期栽培向きである。莢は極めて細く色は濃い。

##### (1) 畦立て

本圃は土壌が肥沃で排水・保水性が良く、耕土が深く、日当たり良好な圃場を選定する。また連作圃場やセンチュウの被害がある場合は、太陽熱消毒を行う。

135～150cm畦幅の高畦を作る。播種前20日前までに畦立てを行い、トンネルを被覆して地温確保に努める（最低地温15℃）。アブラムシ対策のため薬剤を散布しておく。雑草防止と地温確保のためにグリーンマルチを利用する。灌水チューブを設置し、マルチ被覆をする場合は土壌水分が適湿状態で行う。

##### (2) 施肥

肥料は有機質肥料か緩効性肥料を用いる。また追肥は、開花時から着果時期が最も肥料吸収が大きいため開花前5日頃より行う。

施肥量		(kg / 10a)		
	N	P	K	備考
基肥	13	32	13	
追肥	20	15	20	
全量	33	47	33	

### 3 播種

1月上旬より播種を順次行う。畦幅1.5～2m、条間40cm、株間35cm、1穴2～3粒播く。発芽適温は20～25℃以上と高いため、播種後植え穴に保温資材（ポリやビニル等）をべたがけし地温を確保する。立枯病予防のため薬剤を1株当たり1～2g処理する。発芽後は過湿状態にしないようにし、補植苗をポリポットに用意しておく。

### 4 播種後の管理

GA処理：茎の伸長（ハウス促成を参照）

#### (1) 温度管理

##### 昼間温度適温23～26℃

30℃以上では、花粉の稔性が悪くなり落花・落莢・曲がり莢の原因となる。40℃以上で生育障害を起こす。

##### 夜間温度適温15～17℃

13℃以下の低夜温では花がだらだら咲き花粉の稔性が悪くなる。落花・落莢・曲がり莢の原因となる。10℃以下で生育を停止する。

最低温度15℃を確保する。

##### 地温適温22～23℃

根毛の伸長最低温度は13～14℃。8℃で枯死するため15℃を確保する。

15℃以下30℃以上にならないようにする。

春の高温時は白寒冷紗等で気温を低下させる。

#### (2) 換気

多重被覆下では40℃以上になりやすいためこまめな管理をおこなう。トンネル、カーテンは午

前中の光線を確保するため、温度を確保できたら早めに開ける。

#### (3) 水管理

灌水は本葉2枚期以降より行う。土壌と天候を見ながら5～7日おきに3～5mm灌水する。植壤土での適水分はPF1.5～2.0程度である。晴天日の午前中に行い、冷たい水で地温を低下させないようにする。灌水むらのある株は手灌水を行う。

前日曇天で湿度が高く、当日朝から晴天で急激に光線が入り込む場合は、葉焼けを生ずる場合があるため注意する。

#### (4) 誘引・摘葉

誘引は必ず行い、光線の確保と養分の転流がスムーズに行われるようにする。

混み合う葉や病葉・老化葉は早めに摘葉を行い株の内部に光線を当てる。1度に多くの摘葉を行うと樹勢が低下するため行わない。

### 5 収穫

開花後14～20日の若莢（12～14cm）を中心に収穫する。こまめに収穫を行い株に負担がかからないようにする。